

---

Please protect the future. 未来を護れ！

蓮希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Please protect the future · 未来  
を護れ！

### 【Zコード】

Z0637F

### 【作者名】

蓮希

### 【あらすじ】

偉い偉い皇女様やその護衛役やその皇女様の兄上の三人と異界か  
らやってきちゃつたりする最強な主人公が繰り出すまあ世界を護れ  
的な所謂ファンタジー話。笑い有り涙無しシリアルスラッシュのほの微  
妙みたいな感じでやっていきましょう。

## 一話 異界の神と人間です

多分何時もと同じ帰り道だつた。いや、多分じゃなく絶対なんだけれども。

国生蘭樹　じっこくじゅう  
國生蘭樹は心の中で叫びかけた。だけど此処で冷静さを失つてしまえばそれこそ終わりなので何とか我慢する。

そんな事を心の中で思い、現実から田を逸らさないために顔を上げ、前を見つめる。田の前には、黒い空間。

自分の手の感覚と立つていてるぐらいの感覚しかつかめなく歩いてみよう足を踏み出してもその感覚はなかつた。その動く手で自分の頬を思いつきりぐにゅーんつとつねると……

駄目だ。普通に痛かつた。夢じやない。アニメじやない。本当のこと……ぱ、パクつてなんか居ないぞ。うん。決してパクつていな

とか蘭樹が自己完結している間に田の前に眩い光が生まれた。

その光から生まれた少年　金色の髪を持つ少年は蘭樹を見てクツクツクツと笑い出す。

蘭樹は不機嫌そうに頬をかいた。

「よう。ランキ。」

「誰だよオイ。俺こんな知り合いいねえし? 大体こんな綺麗に髪染めてる奴なんて始めてみたぜ。俺は」

態度のでかい少年に蘭樹は余裕に言い返す。すると少年はむつとした顔で言い返した。

「あ? お前だつて蒼髪の癖によく言つなあ」

「俺のは地毛だ地毛。文句あるのかこの餓鬼んちよ。」

「がつ……餓鬼んちよ……失礼なつ! 僕はこれでも髪様だぞ! 髮様! 馬鹿にするなつ! と言つ風に片手に握り拳を作つた少年。それを見てまた蘭樹はケツと笑つた。

「髪の様? はんつ、餓鬼くせえ。変換間違えてるしよ

「…ちつ違つ！僕は異界の門の神様なんだっ！」

急に態度が小さくなつたな…とか内心思いながらくつくつと笑い出す蘭樹。

「…どうより俺は餓鬼の遊びに付き合つてる暇ないんだが？」「遊び言つなつ！」

怒鳴つた少年は　いや、神様か　乱暴に頭をかき、蘭樹に片手を差し出した。

「僕はエリコース。お前たちの住む地球…アースとある異世界…FWD…FANTASY WORLD DREAMを繋ぐ扉を守る、神だよ。さてと、蘭樹。僕は君にFWDを助けてほしくて呼んだんだよ。…って、蘭樹？聞いてる？」

蘭樹はガシガシッと頭をかきながら胡散臭そうに目の前の少年…エリコースを見つめた。目の前のゆれる金色に揺らぐことない赤い目。この綺麗な赤い目は確かに、蘭樹の住む世界では見られなかつたがそれだけで異世界のやつだとは認められなかつた。  
もっとも、適当に話を聞き逃していた蘭樹はエリコースという彼の名前しか理解できていなかつたが。

「…………んあ？」

「…怒つたもんなつ！僕は怒つたつ！君の返事ぐらい聞いてやろう」と思ったのにもう有無を言わさずFWDに落としてやるつー…そらば蘭樹つーさつさと地獄に…じゃなかつた。FWDに落として…ひつ！？」

せつきまで動けなかつた筈の蘭樹の足はまっすぐにエリコースの元へと歩き出した。顔はこれでもかつてほど笑顔である。ただし、引きつった笑みなのだが…

「言つてる意味がわかんないんだが？最初から全部言つてくれるよな？」

そういうつて、一步、また一步と足を進める蘭樹にエリコースは信じられないようにつぶやいた。

「何でつー？何で神のこの僕の力を君に破られるの？いやつ、確か

に強いほうがいいからって能力高そうな奴を選んだのは確かだけど  
…でも神の力を破ける人間なんて聞いたことがないぞつ！？ってあ  
あああああっ近づかないでくれえええっ！」

どうやら蘭樹が動けなくなったのはエリュースの力のせいだそうで  
エリュースは一步、また一步後ろへと下がる。そして慌てて神にし  
か使えぬ、神の力を使った。

「異転送つ！…無事を祈るからねつ！國生蘭樹つ！」

口ではそんなことを言いながらも、実はほのかにみんな恐ろしい人  
間死んでしまえーつと思っていたのは此処だけの話である。

## 一話 活発皇女とメイド

蘭樹が落ちた先には真っ黒い闇の世界はなく、眩い光に包まれている…太陽の出ている世界だつた。目の前には見たこともない素材でできた国があり、その国の門にはどうどつと『レーティアン』と書かれていた。

今落ちた蘭樹にとって、この世界がどんな所であり、この国がどういうところのかはまったくわからなく頬をかいた。とりあえず長い蒼い髪をひとつに結びはあつとため息を着いた。

「確かに……ファンタジーワールド…ドリームとか言ってなかつたか？」  
「此処は…」

目の前の大好きな国には立ち寄らずに近くを歩き始めた。町やら何やらで情報収集は基本的な基本なのだが、その前に蘭樹にはやりたいことがあつた。

エリユースという神をぶっ殺すこと　　と「うと物騒な発言になるので、エリユースにお仕置きをする」ということ　　がやりたかつたのだが残念ながら神はそうそうと人間の前に姿を現さない。

蘭樹がしばらく歩き出した先にはグルルルッと鳴く狼がいて蘭樹はん？と首をかしげた。目の前にいる狼　　ワースウルフというのだがを見てああつと納得した。

蘭樹は何度かRPGのゲームをやつたことがあるので、どういう状況なのかは大体理解できた。

これはモンスターで自分が攻撃されそつなのか…と冷静に解釈していると狼は飛び掛ってきた。おつと半開きだつた目を軽く開いて軽々とその狼の攻撃を避けた。

「何か魔法とか使えないのか？……つりやつ、『雷よ（サンダー）』

「」  
適当に思いついたのをいえば、まだ魔力のコントロールというものの存在を知らぬ蘭樹に雷が襲い掛かってきた。へつ？と蘭樹が反応

するより先にいくつもの雷が狼とそのあたりの木に落ちていった。  
蘭樹はというと……軽々しくそれを全部よけていた。

いまさらなのが、神の力も破り幾つもの雷を全て避ける蘭樹はいつたい何者なのだろうか……と、異世界の門から動く事のできぬエリコースは魔法を使い蘭樹の様子を見つめていた。

あのままあそこにいたら僕は殺されていたな……と静かに悲しい事を思いながら。

「……さてと、国にでもいつてみるか」

先ほどの国に行つてみたくなった蘭樹はつきつきとその国に続く道を歩き始めた。

「待てっ！」

「「この国は許可証のない者は立ち入ることできぬ！」

「とつと立ち去れ！！」

二人の兵士が持っている槍で門を交差され入ることのできなくなつた蘭樹はぽりぽりと頬をかいた。鎮國中か？みたいなことを考えるがまあRPGとはそんなものかと一人納得する。

かといえ此処を逃せば何処に町があるかなんて聞けなくなるのでせて目の前の門番らしき兵士に話しかけた。

「じゃーさ。地図くれ地図」

「地図だと？貴様のような怪しい格好をした人物にやるものなどない！」

その言葉に軽く頬を引きつらせる蘭樹。此処は冷静になれ。相手は兵士だ……ぶん殴つたらそれこそ終わりだ……となんとか自分を落ち着けさせて自分の格好をまじまじと見る。

短パンによれよれのTシャツにスニーカー。そんなにおかしい格好か？とぼんやりと思う。

「いーれーる。せめて地図くれ。もしくは何か補助アイテムくれ」

「ええいつ知るか！－しつこいと牢獄行きだぞ！－」

「へー。牢屋つてどんな所なんだ? やっぱり鉄格子がこいつ... ズラーニーッと並んでるのか?」

妙なことに興味を持った蘭樹に顔を引きつらせる兵士一人。

「(なあなあこいつどんだけ田舎者なんだ!?)」

「(俺が知るかつ!!)」

ぶつぶつと一人が話しているのを見てはあーっとため息をついた。  
そんな時、内側から門が開いた。

「そここの殿方をお城にご案内なさい」

一人のメイド服を着た女性が、そこに立っていた。爽やかな赤い髪を靡かせて無表情で蘭樹を見つめていた。美人といえば美人なのだが顔も整いすぎてどうも人形にしか見えなかつた。

その林檎のような真っ赤な整つた唇が形をとる。

「皇女様がお占いになされました。そのものが、閉ざされし未来を救う者だと... 異世界の門の神 エリュースに導かれし者... と。今すぐ其処の殿方を門の奥へ... 後はわたくしがどうにかしましょう。」

「はつ、」

「承知致しましたつ!..」

その様子をぼんやりと見つめていた蘭樹はぐいぐいと兵士一人に背中を押されていた。

「貴方様がそうだったとは... 今までのご無礼お許しください。」

「貴方様が我等の光となる方だったなんて...」

話についていけない蘭樹はそのまま門の奥へとつれてかれ... メイド服の女性に右手を差し出された。

「わたくしは、エレティスナ=レディアントで御座います。このレディーアンに来て下さったこと感謝いたします。ランキ様」

「…？俺の名前知ってるのか？」

「はい。それも皇女様がお占いになされました。とにかく、貴方様が本当にこの世界を救つてくださる方なのか皇女様に話をして…それが本当ならば、身勝手ながら貴方には世界を救つて貰うことになります。もし…違うというならば、無礼の代わり……この世界共に有許可証を差し上げましょう。」

「ふーん。エレティスナって言いにくいくらいだけぢ」

相手の言葉を適当に流し自分の言いたい事を伝えた。すると、エレティスナは少し困った顔でランキに言つ。人形っぽい顔が少し人間に近いような感じの表情だった。

「…………そのような事は言われませんでしたから…………やはり、貴方の住む世界とわたくしたちの世界は違うのですか？」

「まあな。大体こんなでかい門なんてないし…モンスターなんか出ないしな」

「それは…………平和なのですね…………。わたくしのことは、呼びにくいでしたらエレナと…お呼びくださいませ」

そういうて、薄く…本当に薄くだつたが小さく笑みを作つたエレナにおう。とランキは返事をする。

それが、これから先世話になつていいくメイド兼剣士であるエレティスナ改めエレナとの出会いであった。

「お連れしました。皇女様　此方が、ランキ様でござります。」

そういうつて礼をするエレナにそつかそつかと皇女は活発に笑つた。ランキには皇女らしさのカケラもない、元気な少女に見えた。大きな黒い目をパチパチとさせ、その短い橙色の髪の毛はより活発な印象を与えた。

「ランキ、だつたなつ！あたしは、アルテシェロイラス＝ティキ＝

フレーデイルだ。」

そういうて、ランキの前まで歩いてきたアルテショイラスは右手を差し出した。しかし、ランキはその手を受け取らうとしなかつた。せいぜい13歳あたりである「う」という感じの皇女をほんやりと見つめたランキはポソリッと声を漏らす。

「……名前、覚えられねえー…………」

「そりか？そんなに長いだろ？世の中あたしより名前の長い奴なんて腐るほど居るぞ？兄上はだな、シェルフティンス＝アレン＝フレーデイルだ。どうだ？覚えられぬか？」

といつよりエレナの名前すら覚えられないランキにはそれは十分無理難題であった。

「ああ。」

「…そりかあ。やつぱりこの世界とあつちは違つのだなつーあつじやああたしはアロンスで良い！」

そういうつた元気な少女の手を、やつとランキは取つた。

「ランキ＝コクショウだ。一応日本人。ジャパニーズ。アイフロムジャバーン。此処の世界のこと教えてほしいんだが？」

「あい……ふるー？シャバ……？」

シャバとか違う意味だらうとかランキはひそかに思いつつも二カッと、笑つた。

「ところで歳いくつだ？」

「今年17になる。」

・・・・・・・・・・・・

「同じ年いいいいつ！？」「んなチビがつ！？」

「なつチビとは失礼なつ！？お前がでかいだけだよつ……」の身長で十分なんだよつ！ねつエレナ！」

「申し訳ありません。答えかねます」

「エレナアアアアアアアッ！！！」

泣きかけている。完全に泣きかけている。ちよつと涙が潤んでいる。そんなアロンスを見てランキは馬鹿笑いをする。

エレナは人形みたいな無表情をそつと薄い笑みにかえた。

「で……この世界の事だが……ううつ、うつうつ……」

「おらおら、泣いてないで早く言つてくれ」

「あたしの守護役の癖にエレナは其処でクスクス笑つてるし……やつてられないわー！！！あたし皇女なんだけどっ！…？」

「この世界の人間じゃねえ俺には関係ない」

「うつ、そうかもしねり……ど。」

其処で丸め込まれるアロンス。ランキはニイイツと笑つた。まるで面白い玩具を見つけたかのような笑みで。

「よしつ、気に入った。アロンヌッ！お前は俺のおも『ホンッ、仲間にしてやらあつ！』

「いや、元からそのつもりだつたけどとこより玩具つて言おうとしたよねつ！？絶対にあたしのこと玩具つて言つ氣だつたよなあつあつ！…」

完全に皇女には思えないその少女アロンスと無表情な女性エレナは、その田ランキの仲間となるのだつた。

## 一話 活発皇女とメイド（後書き）

はい。長編一個も完結してないくせにまた新たに長編を書き出した  
蓮希です。

…って痛い痛いつそんなに石投げないで…

やつぱりファンタジーなら他のを更新しりょ…って思った人…「」も  
つともです。

とはまあ、始まってしまった作品を見守ってくださると嬉しいです  
(こんなのを一話目で話す自分もどうなのか…)

## 二話 呼ばれた理由と現実（リアル）の友人

ファンタジーワールドドリーム。FWD……

この世界にランキが呼ばれた理由は、この世界のバランスを直すことだった。

まず、この世界のバランスが崩れたのはある人間のせいだった。人間は生きて 死ぬ。そのバランスを持たぬものがこの世界に 一人 居た。

生きて、ずっと生きなければいけない運命を持つたその者は不老不死と言える存在でありその死ぬことの出来ない一人の人間のせいでこの世界の全てのバランスが崩れる。

もともと、このバランスを崩したのは神だ。アロンスは、身勝手な神： そう、ポツリと呟いた。

自らが願つて手に入れた身体ではないのにそれを神に責められたその人間はずつと、ある場所に隠れているようだつた。

そして、それを怒つた神はこの世界にモンスターを作り人間を襲わせた。

何時しかこの世界は荒れ始めた。海面は上昇し： 何時しか、この人間が住む地は海に飲まれて無くなるかモンスターに殺され絶滅するか……選択肢はこの二つになつてしまつた。

そんななか、皇女であるアロンスが考えたことは他の人間を召喚すること。

それによつてバランスが更に崩れる前にこの世界のバランスを直し、神に当たつてくれれば良い。

そう考えたアロンスは、心優しき……異界の門の神 エリュースに頼み込み快く返事をくれたエリュースはランキを召喚んだ… というこ

とになつた。

「……頼む。世界を救つてほしい。」

「ふーん。分かつたー」

「軽つ！？ 神もかかわってるんだぞつー？」

「別にー。とりあえずやってみて駄目だつたら俺帰るーでいいじゃ

ねえか

「アーニー、お前が何をやるかわからん！」

「アーティスト」

「おら、じゃ今日は寝るつて事でおらおらーつ寝床だせや」  
その言葉に鬼…つと咳いたアロンスはランキの怖い笑みをもらい…  
しかし、ランキの笑みを見て、アロンスは静かに礼を言つたのだった。  
た。

有難う

その言葉は聞こえていたのか、聞こえていたのか…ランギは反応することなくエレナに用意された部屋へと向かっていった。

ランキは身を起こし「ういー?」と気が抜ける声で返事をすれば、そつと中に入った人物が居た。

アロンフのよ二が 橙色の長い髪をなじかせ中はノ二た人物はは  
見えがあつた。

卷之三

「ん、お前亞煉か？」

「軽つ！！？何だお前、その反応軽すぎないかつ！？いや、……分かつてたが。どうせお前の事だろ？……アルテシエロイラスにもそんな事を言われたはずだ」

「ほひ。よく分かつたな」

「マジかつ！？」

その日の前に居る人物は、ランキと同じ高等学校の同じクラスメートだったはずなのだが、またそんな彼が何でこんな所に居るのかなんてランキはきにしなかった。

くしゃくしゃつと自分の髪を触る亞煉ははーっと大きなため息をついた。

「もうちょっと驚いてくれると思つたんだがな」

「十分驚いてるんだが？ところで亞煉。喉渴いた。」

「知るか」

「いや、エレナに頼んだんだけだな……」

胡坐をかいたまま大きな欠伸をしたランキに亞連は高校の時と同じ笑みを浮かべた。

亞煉が何か口を開こうとした時、また扉がノックされる。

「ランキ様。遅くなつて申し訳ございません。お茶になりま……これは、シェルフディーンス様。」

お茶の乗つたトレーを片手に入つてきたエレナは亞煉 シェルフディーンス の顔を見るなり礼をする。

「ご苦労、エレティスナ。」

エレナの言つたシェルフディーンスといつ言葉に、ランキは何処か聞き覚えがあつたような気もした。

目の前に居る橙色のまあ多分友人である相手はニカッと笑つた。エレナが去つた後ランキに手を差し出す亞煉は何処か、嬉しそうだ。

「俺が、この世界にお前を呼ぶように頼んだんだ。ランキ」

「お前が？」

「ああ。もともとこの世界の皇子である俺が誰よりも先に動かなくてどうする。アルテシロイスに全て任せられないからな」

「……皇子？」

「俺は、アルテシロイスの兄、シェルフディーンス＝アレン＝フレーデイルだ。エリユースに頼んでお前の世界に行き、お前を探し出

した。全てはこの世界の為に……力を、貸してくれないか?「ランキ」

ようやくペースがはまつた。

やつと、自分の友人であるアレンはその為に日本へと来たのだ。  
そして、自分をこの世界に呼ぶことを決めた。

それがどうこうことなのか、どんな事で決めたのかなんてわからな  
い。

ただ適当にだつたのかもしれないし、ランキの中に眠る何かを感じ  
たのか

兎に角、この世界を救うという使命を負わされたランキは、その手  
を取り軽い返事を返した。

アレンは何も考えていないようで、いろんなことを考えているラン  
キに惹かれたのかも知れない。

兎に角全ての鍵は、エリクースが持っている。

明日から、長い、長い旅が始まるのだ。

## 四話 森を抜けよう！

「ああっ、逝くぞ…………」

「……何処へ？」

俺の適当な言葉に突っ込む アロンス エレナ アレンの三人。仲いいなお前等とか思いながら俺はいそいそと昨日買つてきた装備をする。

腰に長剣一本。

同じく腰に短剣一本。

同じく腰に銃一本。

同じく腰にマシンガン

同じく腰に人参……

「何でだよっ！！？」

「人参持つていたのなら昨日調理しましたの！」

「エレティスナは黙つてろ！オイフランキッ！－何でそんなものもつて……」

「売つてたから」

「売つてたら何でも買うのか貴様はつ！！」

ふむふむ。今の調査結果から分かつたことは アロンス アレン突込み 俺 エレナはボケということだな。

「何調査してるんだお前」

「おおつ心の声まで読むとはなかなかだなつ！」

「良いからさつさとその不老不死探そうぜえ……」

あ、アレンが既にぐつたりしてゐる。しかたない。そろそろ逝つてやる事にしよう。

アロンスは俺に強制的に仲間にされ、それによつてメイド兼護衛だつたエレナ（ついでに今は普通の旅人の服だ）がついてくることになり、まあ妹とエレナとお前がついていくなら…とエレナに惚れてるアレンがついてくることになり……

「待てッ！なんで俺がその…… アイツに惚れてるとか！？」

「むふむふ。やっぱり惚てるんだな」

「そんなことねええええええええええつ――！」

あつ、アレンがキレた。

「まずは、此処から近い街……アスラに行つて情報収集してみよう」  
そのアロンスの一言で俺達は50km強はなれたアスラに向かうことになった。

……俺、ただの人間なんだけどなあ。そんな50kmも簡単な顔して歩けるわけ……

まあ、俺だからあるんだけどなーーー！其処、オイとかいう突っ込みをするなつ！

ということアスラとやらに向かうために森を抜けることになった。  
「あつ、魔物魔物。兄上！」

「俺任せかよつ！？」

意外と良い性格してるなあ。アロンスは。

「とりあえず戦闘準備しどけつ！このへんは演歌雲と率高いぞつー！」  
「何もかも間違っています。シヨルフティンス様。」

「一発変換したらこうなつただけだつ！」

ああ、もううぜえ。とりあえず魔物をぶつ殺せーーーつて事で。

「はい。火炎球ファイアーボール」

適当に魔法をぶつ放して見た。はい。三頭居た魔物全滅つーやるじ  
やん俺ー。

「何だよお前等？」

「…………」

「…………」

「…………」

俺がその魔物の中から丸いクリスタルのようなものを取り出してほーと珍しい顔をして見ていると物凄い沈黙が襲ってきた。

何だよコイツ等？

…ところでこのクリスタルってRPGとかだと金に代えられるよなー。ここでも出来るのか？

「「「強すぎ（じゃね？）です」「」」

「は？」

俺は何言つてるんだコイツらみたいな視線を向ける。何かさつきからこんな視線だ。おい、これでいいのか。

「……ランキ様。その、ランキ様の世界では、魔道士……魔法使い……精霊使いなどあつたのですか？」

「うんにゃ？んなもんねえけど？」

大体友人にそんなこと聞いたらお前何言つてんだよ阿呆つて思われるに決まつてんだろうが。やつぱり異世界つてあれだな。不便だな。大体魔法なんて適当に念じれば出来たしあれか？誰でも出来るわけじゃないのか？やつぱりRPG使用？

「あ……あーる、じー？……わかんないが、大体全員が全員魔法使えたら苦労しないよ」

「おい、心を読むな。」

「声に出てる。何か間抜けだな。お前がしがしつと髪をかいていうアレン。むつ失礼な。俺が間抜けだと言つのか？」

「ああ。今現在進行型で」

何か物凄いムカつく……けどまあ良いか。

で、このクリスタルなんなんだ？

「あつジエルクリスタル」

「ジエルクリスタル？」

「この世界のお金の単位はジエル。そのジエルを代えられるクリスターだからジエルクリスター」

ふーん。思つたとおりなんだな。と、そのクリスタルを懐にしまう。

ふと、アロンスが呟いた。

「あ、魔物」

ザシユツ

その辺から現れた魔物を適当に長剣で切り刻む。あ、ちょっとグロ  
い。

「……あの、ランキ様」

「? 何だエレナ」

「その……貴方の世界に剣士……等は……」

「あー、ないない。俺の世界ではあれだ、武器持つちゃいけねえん  
だよ。まあ刀ならあつたけどな。」

「力タナ……ですか。」

「この世界で力タナつてないのか?」

「あるぞ? シェインベルトで売っている。最も私は短剣の方が手に  
なじむから長剣や力タナなんか使わないがな」

シェインベルトって何処だよそれ。……まあ別にどうでも良いんだ  
がなつ!」

「魔物」  
アイスレイブ

「氷雨」

「まも」

「龍斬つ！」

「ま」

「失せろ」

次から次へと出てくる魔物を狩りまくつて序にさつきのクリスタル  
を拾つておく。

後ろの三人を忘れて先ほど見た記憶の地図を頼りに森を歩いていつ  
た。

「俺達いらぬんじゃね?」

「思つたぞ。今……」

「……私達の立場はなんですか。」

静かに呟く三人が居た。

四話 森を抜けよう。（後書き）

次書く前にHPしたのでストックが減りました……；

## 五話 意外な真実

あれからすんなりとアスラに着いた俺達はまず一田田は宿で休み……一田田……つまり今日、情報収集することになった。

チツ、面倒くさいの……とか思つたがまあ一度引き受けたからにはきちんとやってやる「じやねえかこの野郎！」

「じゃ、一人ずつ分かれよう！」

アロンスのその一言で俺達はじゃんけんをして……決まったチームがこれだ。

俺 エレナ

アロンス アレン

のチームなんだが…………アレン。そんな憎しみのこもった目で睨まないでくれ。

どんだけエレナに惚れてるんだよ。あいつ。

「では、行きましょう。ランキ様」「

そういうて歩き出すエレナに適当な返事を返し俺はその隣を欠伸をしながら歩く。

「…………身長、高くて良いですね」

ポツリッとエレナがこぼす。何だ行き成り……

「アルテシヨロイラス様もシェルフティンス様も身長が高いというのに……何故私だけ低いのでしょうか？」

「あれだ。牛乳飲んどけ。」

その言葉にもうやつてますといつ返事。やべ、「イツ面白いっ！」

俺がクスクス笑っていると少しだけ顔を赤ぐするエレナ。無表情じゃなくなつた途端急に可愛くなつた。

とまあそんなエレナにトクンッ……なんてときめくはずがなく……（何でかつて聞かれたら俺だからとしかいよいづがないな）俺はまた笑つた。

「そりいえばこの世界では監名前が長いのか？」「

「え？」

「ほら、アロンスもアレンも長いだろ？エレナは其処まで長くないな…って此間理解したが。えーっとエレティスナ？」

「覚えてたのですね。はい。そうですね、この世界では私ぐらいの名前が普通なのではないのでしょうか。ランキ様ぐらいの長さの方も居ますし、だから名前が長い人が珍しいので……」

そういうて笑みを落とすエレナ。というより聞き込みしてねえな。俺が思い出してガシガシッと頭をかくものの、エレナはそれに気づいていないらしく嬉しそうに話をする。

「女王様が『童は名前の長い方が王族っぽくて良い！』と騒ぎまして……そして名づけられたのが第一皇子のショルフティーンス様で、その次に生まれたのが皇女のアルテシェロイラス様でした。そしてその一年後辺りから『ジエルフリンク…』とか、シェルフティーンス様の名前を間違えまして……」

クスクスッと笑うエレナからはその女王もアロンスもアレンも大好きなんだな…というのがよく分かつた。

俺は適当に相槌を打ちながら、隣を歩く。

「『誰じや、こんなに名前を長くしたのはつ！』と王様を困らせました。まったく、こまつた人ですよ？ですから次の第二皇子はレン・シェルト。皇女様はフレイルと名付けられたのです」

「へえ。困った女王もいたもんだ。…って事は四人兄弟なんだな？」

「はい。」

「じゃ、何でエレナは其処に使えようと思つたんだ？」

その言葉にへつ？と間抜け顔をするエレナ。

「あ……私が、女王様の妹の子ですから。」

ふーん…………って

「エレナも王族！？」

「あまり、大声で言わないで下さい……／＼／＼自覚をあまり持つてないで追い出された身です。それを女王様……伯母様に拾つてもらいまして」

「へえーと俺は目を見開いた。

「んで、アロンスとアレンの世話役か。てか何で俺の周りに三人も王族が……てか、それで良いのか。レディーアン。

「だから、お前の苗字……ファミリー・ネームって奴と国名が似てたのか？」

「はい。そのとおりです。よく覚えていましたね」

「そういうつて、クスクスッと笑うエレナ。

「誰だ。エレナを無表情なんて思った奴……って、俺か。

その日、俺とエレナは聞き込みが出来なく……宿に戻つてからアロンスに怒鳴られる。

それすらも面白く笑つた俺とエレナにアレンから嫉妬の目を向けられる。

これが、異世界に来て三日後の出来事だ。

## 五話 意外な真実（後書き）

11月14日の更新停止発言ですが5月21日の今日、復活しましたー！

少しずつですが更新復活していきますー。

## 六話 夢の中での出来事（前書き）

お久しぶりです、蓮希です。何か最近全くって言つていいほど更新してないっすね……

## 六話 夢の中で出金

アロンス、アレンから聞いた話だとその不老不死野郎は此処から少し離れたウェーディズという街に居るそうだ。

随分とあっけなく見つかりそうだな。不老不死。

ただ、ソイツは旅人としてすぐに姿を消すようだから今日来たかと思えば今日居なくなつてるとか……それだけの通りすがりじゃないか？

「まあ手がかりはウェーディズしかないからな。其処に行こう」

「アイアイサー」

「あ、あいあい……？」

そんな話をした俺達はその日、宿を取りまた眠ることになった。

「」

エーリア 何処

目が覚めたら真っ暗だった。俺はポリポリと頬をかいてあたりを見渡した。デジヤヴ？

確かにあの時はエリユースに呼ばれたんだが……。そんなことを思ひながら俺は歩き出した。一步、また二歩と……気づけばだいぶ歩を進めていたようで真っ暗な闇の景色から、明るい空が見えてきた。

チュンチュン……と小鳥の鳴く声。辺りには花畠が広がっている。何だこれ。夢か？と頬をつねれば痛かった。現実？リアル？それともドリーム？……分からないな。  
俺は欠伸をしながらその花畠を歩き出した。

「君は、エリア……？」

ボソリッと呟く声が聞こえた。パチパチと田を瞬きすれば目の前に居る青年。

闇のような黒い髪を靡かせた、青年が居た。まだ少し幼さの残るような、でも大人っぽい表情をした青年。その目は丸に見開かれていた。

何だこれ。恋愛ショミレーションかなんかの恋愛イベントか?なんかわけねえだろうが。

大体俺は男だ。男に迫られても興味がない。……じゃなくてだな。

「誰だ?お前」

俺は頭をかきながら聞くと青年は沈黙してふるふるつと首を横に振つた。

「……………エリアに似て、エリアに似ない者……君は、誰だ?」

「名乗る時つて自分からじやねえの?」

欠伸をしながら言つとその青年は困つたよつて「ああ」と微笑んだ。青年といつより少年といつ表現の方がつているきがするな……と今更ながら思つた。

「俺は、イズ。イズ=イース。」

ポソリと寂しそうに呟くイズにそつかーと俺はその場を去りつとする。

オイツて突つ込みはなしで。此処の小鳥の鳴く声と花畠がある此処は妙にむず痒い。

夢の中でこんなのが見る俺つて何なんだよオイ。

つて事でおきてアロンスでも弄りたお……

「ちょ、待つてくれよつー俺は名乗つただろつ?といつ何故に其処で去らうとするんだ!?」

「いや、面倒くさいし」

「面倒くさいって……なんだ。俺と使う時間はそんなに……分かつたよ。……エリア。現実は厳しいね」

いや、誰かエリアって……といつよりお前は何者だよオイ。

「…………ランキ。」

はあ―――と大きな溜息を吐きながら言えばパアツと顔を明るく

させるイズ。

「わ、有難うつ。俺…………エリア以外に名乗つて貰うの30000年振りだつ」

「w h a t？」  
……30000?0四つ?

「え。何語? 異国の人?」

「I f r o m t o k y o」

「あ、あい……?」

ちょっとからかいすぎたか。と思つ。

大体目の前の奴頭真つ白になつてるみたいだし。いや、だつて30000年ぶりつていつたんだぜ? 「イツ。

「…………あ、不老不死の野郎だ」

普通に300000つて言つたらそれぐらいしか思いつかないんだが  
……イズは物凄く驚いた顔をしていた。

「な、何で分かつたんだ!? 君……心読めるの?」

「さつき300000年ぶりつていつたじやないか

「…そつか」

何かいろいろ突つ込みどころがある奴だな。 「イツ。

何だ。天然というのかコイツは。 そうか。 そういうことだな。

「ところで此処何処だ?」

「あれ? 今更?」

イズの話に寄ると此処はイズの精神世界だそうだ。 不老不死の彼には不思議な力が宿つているらしく強く願えばイズの願つた人がその精神世界に現れるようだ。

ある日(といつても何年も前なんだろうな。きっと) FWDで出会

つた少女ともう一度会いたくなり、その少女を此處に呼んだのが始まりだそうだ。

それが、エリアという少女だったらしい。俺には何もわからないがな。

何年もの時がたち、ある日突然……何時も精神世界で話していた少女 エリアを呼ぶことが出来なくなつた。決して力を失つたわけではないのに。（つまりそれはエリアが死んだんじゃないのか？）何度も何度も呼んでも現れることのなかつた少女。

そして今日も少女を呼ばうとし……するとエリアとかそんな奴の事を知らない俺が現れたらしく。…………変なの。

ようはあれだろ？ イズがエリアに会いたくて呼んだら俺が来たんだろ？こんな説明して読者の皆様が分かるとは思わないしな。

「ふうん。で？ 何で俺が来たか分からないのか？」

「多分ランキが来たのは、エリアとランキが同じ波長だから……でも、同じ波長を持つものなんて、世界に居てはいけないのに」「波長……？ 何だ？ それ？ まあ後でアレンに聞いてみればいいのか（アロンスは結構天然だつたりするから知らないと思うしな）」「所で、さ。俺はお前を探してるんだ」

その言葉にへ？と首を傾げるイズ。

「俺を？」

「ああ。で、ウエーデイズに居るのか？ お前

「俺？ アロルドに居るけど？」

「……アロルド？」

何処の町だそれ…………まあ良い。後でアレンに聞いてみれば良いんだな。

「うん。その通り…………ふあああ……俺眠くなっちゃつた。君とあえてよかつたよ！ また呼ぶからね～」

「え？ あ？ つてオイツ！ ！」

欠伸をしたイズはニコッと笑って花畠に倒れて眠りだした。それと同時に俺の意識は失われていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0637f/>

---

Please protect the future. 未来を護れ！

2010年11月13日02時44分発行